

解
読

浅田兄弟敵討一件

全

茨城県立図書館

郷土資料整理ボランティアグループ

浅田兄弟敵討一件

一人之保加賀守以我足怪成形弟物と申老去く宣
 七月廿九日傍輩浅田唯助と申之の尾は子孫
 為負山と申唯助は源子と申翌日お果万助は
 於其場と申吟味申す今全礼心りお透と申
 之申す月宰令申す此尚二月宰抜い多為
 若者等と申今礼心申すお申出と申宰抜
 い多し山と申本心り立度り此とお果と申唯助等
 浅田秋藏當座二十歳弟門次郎當座二十歳分八旬端

浅田兄弟敵討一件

浅田兄弟敵討一件

一大久保加賀守改我等足輕成瀬万助と申者 去々寅

七月致乱心 傍輩浅田唯助其外のもの共江手疵

為負候の処 唯助儀ハ深手にて翌日相果 万助儀

於其場取押吟味申付候処 全乱心に相違も無

之事に付 牢舎申付候所 当二月牢抜いたし候間

嚴敷尋候へ共 今以行衛不相知申然ル処 牢抜

いたし候上ハ 本心に立戻り候と相察られ候 唯助養子

浅田鉄蔵当辰二十一歳 弟門次郎当辰十二歳領 分ハ勿論

浅田兄弟敵討一件

御府内並何国までも万助行衛相尋 見逢次第

父の敵討取度段 右兩人共願出候_ニ付 聞届見逢次第

討留候得ば其所の役人_江相改可申段申渡し候 為

後日以使者相達候

大久保加賀守使者

文政三辰八月二十一日 志谷弥源次

申来り候

右の趣公義御帳面_江留_ル

敵討心得の事

一 敵討留之具所之國主欲之可辨事

一 江戸沖田悔悔山杯立可為意意立存子唯之

此場新之悔之可然之味

一 万助病死之趣之急度相能少之信如流按拍立度

了中事

向井彈右衛門組下

八月廿四日

續田鏡藏

一 向井彈右衛門組中淺田鏡藏中飯次一件

此は父唯助敵討成儀万助以清相尋討果中成儀

浅田兄弟敵討一件

一 敵討留候ハゞ其所の国主領主江可訴事

一 江戸御曲輪両山杯は可為遠慮其外右に准シ

候 場所は憚候て可然候事

一 万助病死の趣 急度相知候ハゞ慥成證拠持立戻り
可申事

向井弾右衛門組下

八月二十四日

浅田鉄蔵

一 向井弾右衛門組下浅田鉄蔵へ申渡す一件

養父唯助敵成瀬万助行衛相尋討果申度依之

御願お願ふ所願ふ通申付以備手次申上之御
 首既敵討果以之新之段人自始終お願控之通
 之申之上八幡系之御御付之為江戸津屋敷女右衛
 左衛門早速之御願山家内之老右之沙出御持拘之人
 分取下並之為政安臨之通申上且為沙心付
 金拾兩申下並家内之者是迎之申上家
 沙入用方之之通候事如左親類方は
 紙美備手次申上候事

浅田茂實組下

一件討敵兄弟田浅

御暇相願の所願の通申付候 勝手次第出立可致候

首尾能討果候ハゞ其所の役人 江始終相届 掟の通

取計の上ハ帰参可被仰付候間 江戸御屋敷成共向

寄江早速可相届候 家内の者共は御養御扶持三人

分被下置候間 致安堵可遂本望且為御心付

金十両被 下置家内の者は迄の御長家

御入用有之迄御貸被成候 尤親類共方江罷

越義勝手次第可致事

伊田茂右衛門組下

浅田門次郎

実父在国新

右之趣於願定中後作

八月廿六日

白井彈左衛門組下

浅田鉄藏

浅田茂左衛門組下

浅田門次郎

今般親之敵討状願之件此十日於願定中後作

浅田兄弟敵討一件

実父右同断

右の趣於頭宅申渡候

八月二十五日

浅田門次郎

向井弾右衛門組下

浅田鉄蔵

伊田茂右衛門組下

浅田門次郎

今般親の敵討相願候ニ付
昨十日於頭宅申聞候通り

父之仇共小天下不戴之理尤之有之此尤奇
 拘之心度委細達 冲徳の事 捨別之 沖徳と
 有之 公義の事 不給ても 早急 沖徳影之
 少形 捨別之 公義と 沖徳と 宜交 越之 鏡形
 美の事 沖子之 身分の 沖徳 義の 早急 捨別之 大至
 形 公の 心度 奇拘之 故首 尾先 中 宜交 達之 公の
 八 公の 事 方 在 孝道 公の 宜交 具上 捨別之 沖徳 公の
 公の 及 弟一 束縛之 働 公の 公の 一己之 加 守 而已
 公の 沖上之 沖 公の 公の 公の 公の 公の 公の

父の仇共に天不戴の理左も可有之候 尤寄

特の心庭委細達 御聴候処格別の御沙汰も

有之 公儀御奉行所於ても畢竟御旧家の

御家来と格別の御義と御沙汰も宜敷趣ニて鉄蔵

義ハ養子の身分門次郎若年にて 右様の大望

願出候 心庭奇特の儀 首尾克本望相達候ニおいて

ハ弥其方共孝道も相立 其上格別の御沙汰ニも

可被及万一未練の働於有之は一己の恥辱のみニ

無之 御上の汚 御名を義ニ候事ニ付随分勇氣

上筋此分健喜りお帳湧糸く幸至お違每人古
目お夜波海糸く根付候申間非

者之趣お沙勘定新沙田今十合以上満

御渡され

文政七甲申年

浅田 珠藏

浅田 門次郎

文政之辰八月廿五日申年之又々年子と申如く
款万助以末お取立ふふお受當年正月廿八日

浅田兄弟敵討一件

を励身分堅固に相慎潔く本望相達 兩人共

目出度致帰参候様 此段申聞

右の趣於御勘定所御用人千賀八左衛門

仰渡され候

文政七^甲申年

浅田鉄藏

二十五歳

浅田門次郎

十六歳

文政三辰八月出立 当年^ニて五^ケ年にも相成候へとも

敵万助行衛未相知れ不申候処 当年四月二十八日

於列水戸旗印城下二里程在之岩井村
と申越之成津方御美方居九番と改裝致し

因系分危高費致病を治し消病先月廿八日
より方お討し重面所具不子是病九ヶ所付
お果し系水戸殿より子飛脚高江戸辰の口
河上屋敷に申系より舟橋接便大目附仔細谷津
右邊の中目附正法道に紙を九張

書之趣又月後七日申系

水戸殿河津城附右目合書面之寫

浅田兄弟敵討一件

常州水戸領御城下より二里程在ニて 岩井村

と申処ニて 成瀬万助義万屋九兵衛と改名致し

田葉粉屋商売致居候処 段々付居先月二十八日

夕方相討候由 面躰其外手足疵九ヶ所付ニて

相果し候条 水戸殿より早飛脚ニて江戸辰の口

御上屋敷 江申参り候ニ付 為検使大目付伊谷治郎

右衛門下目付召つれ罷越され候

右の趣五月十七日申来候

水戸殿御城付より問合書面の写

水戸殿願分

常州藤澤郡坂濱村

因祝町大星庵住吉庵備

弟尾九三清

右九三清申者前書之通所借宛在公堂具眾家
是輕抄勅以涉田錢病等涉田門理所之志與人
去月廿七日取九三清宛在公堂越就之款之書抄在案
九三清申付留田村所方在公堂紙在九三清
後表實名在成帳方物申中錢為旨款只物也共

浅田兄弟敵討一件

水戸殿領分

常州鹿嶋郡磯濱村

内祝町大黒屋庄吉店借

萬屋 九兵衛

右九兵衛と申者前書の通 借宅居候処 其御家来

足輕相勤候 浅田鉄蔵弟浅田門次郎とは兩人

去月二十七日夜 九兵衛宅江罷越親の敵の由 相名乗

九兵衛を討留 同村庄屋方江右兩人罷越 右九兵衛

儀は実名成瀬万助と申 鉄蔵等親只助と申者

此當七十年以の殺害致し之云此舟在兄弟之老
 とも親之欲討留中夜好急も之南より年以その
 船中互に相尋ふ和苗水より見當此舟則討留此
 之舟中達此候村方各誂出此舟役人其先下通り
 相尋ふ交り書中にて通御相透も此し相相討
 此舟之先敵兄弟二人候を因り所与願方は宿
 中付不自坐せし相尋人左派並勿論九多清
 討留此初回人妻美も少く子承負此里而之藤派
 中付並此且九多清尸之候之時分捕りて其友

を当七ヶ年以前殺害致し立去候ニ付 右兄弟の者

とも親の敵討留申度存念にて 当五ヶ年以前

願申立所々相尋候所 当所ニて見当候ニ付則討留候

の旨申達候段 村方より訴出候ニ付 役人共差出一ト通り

相尋候処 前書申上通聊相違も無之様相聞

候ニ付 不取散兄弟兩人儀は同所町組頭方 江宿

申付 不自由無之様警固人差添置 勿論九兵衛

討留候砌 同人妻義も少々手疵負候由ニて療治

申付置候 且九兵衛屍の儀は時分柄の事故

塩沼致し先古申中付懸る分至許中申來り申出
 之通河左家來申達り無之に檢使酒地は以
 左致し及之先申并九左衛門同人毒也申出
 有之に檢使致し先古申中付懸る分至許中申來り申出
 申出之に水戸殿申出有之に申出有之に申出
 申出之に水戸殿申出有之に申出有之に申出
 但之河左家來申達り無之に檢使酒地は以
 目詰申出申出申出申出申出申出申出申出申出申出

水戸殿致し申出之志是也

塩詰致し先土中申付置候旨 国許より申来り候 前書

の通弥其御家来ニ相違も無之候ハゞ檢使彼地江御

差越御改の上 兄弟並九兵衛屍同人妻をも御引取

有之候様致度候 尤公辺江御達の上 御取計ニ相成

候儀ニ候ハゞ水戸殿よりも被申達候て 可有御座候否

御申越御座候様致度 此段及御掛合御請役人共申候

但シ御家来檢使御差越候ハゞ 右役名並人数出立

日限等被申越候様致度候

水戸殿飛脚の者覚書写

死骸改書

山形新地月所

大黒屋吉備家

九
三
寸

一 九寸身をほろ切下 長サ六寸 横四寸五分

一 首を九寸五分切下 身を五分切下 五分切下 五分切下

長サ九寸 深三寸 程中七寸五分

但し 身は 長サ五寸 程の 古紙 有り 紙力 祇

とも 難 分

浅田兄弟敵討一件

死骸改書

岩船地内町

大黒屋庄吉借家

九兵衛

年三十三

一 左り耳よりほゝを切下 長サ五寸 横四寸三分

一 首の左右より矢はつに切前の方少シかわ懸る

長サ九寸 深三寸程 巾七寸八分

但ひたひに長サ一寸程の古疵あり候処刀疵

とも難見分

一 右之肩先より脊・長サ一丈二寸深サ二寸巾二寸
 一 丸之腕先より二寸うちと切下 長サ二寸二丈深サ二寸
 巾四寸
 一 右之二腕 深サ一寸巾一寸
 一 丸の大指切落し脊の丸の紐をケ 長サ九寸
 二丈深サ二寸巾二寸五分
 一 丸のあたまをケ 長サ一丈四寸深サ八寸巾二寸五分
 一 丸の足元をケ 長サ一丈一寸深サ一寸巾一寸五分
 都合九ヶ所

浅田兄弟敵討一件

- 一 右の肩先より背・長サ一寸六分深サ二寸巾二寸五分
 - 一 左の腕先より二のうて迄切下 長サ二寸二分深サ三寸巾四寸
 - 一 右の二腕 深サ一寸 巾一寸
 - 一 左の大指切落し背より左の脇へ懸ケ 長サ九寸三分深サ二寸 巾 二寸三分
 - 一 左のあばら 長サ八寸四分深サ八分程巾二寸五分
 - 一 左の足ひざした 長さ四寸一分深サ一寸巾一寸六分
- 都合九ヶ所

着数

一本 緋置袴袴 一ツ

一ツ 黒袴單物 一ツ

一 花巻子け布

右に相討小田原大之條加賀守様以是輕重後田珠翁
 日向守所兄弟一略亦七日暮了耐志九條ふみ込
 親之款之申名系り討申す月日速西四時不様
 沙知彼身相古四葉因仕り以成申弦ひ受前古也
 相違なき事

浅田兄弟敵討一件

着類

一 木綿 豎 嶋 裕 一ツ

一 同 豎 嶋 单物 一ツ

一 花色前かけ布ニテ

右ハ相州小田原大久保加賀守様御足輕の由 浅田鉄蔵

同門次郎兄弟一昨二十七日暮六ツ時 右九兵衛方へふみ込

親の敵の由名乗り討留申候ニ付 早速両御役所様

御出役ニ付私共御案内仕り御改申談候処 前書の通

相違無之候

<p>及濱村新屋</p>	<p>新大屋</p>	<p>同 <small>組</small> 新大屋</p>	<p>同 新大屋</p>	<p>同 久吉</p>	<p>岩新地内所新屋</p>	<p>吉野新屋</p>	<p>同 <small>組</small> 仁多清</p>	<p>同 日 新 七</p>
--------------	------------	-----------------------------------	------------------	-----------------	----------------	-------------	-----------------------------------	--------------------

浅田兄弟敵討一件

磯濱村庄屋

新五右衛門

同

組頭
喜右衛門

同

彦兵衛

同

久吉

岩船地内町庄屋

太郎兵衛

同

組頭
仁兵衛

同

同
喜七

寺社方

寺田市之清

同

櫻村留成

浅田形方

渡辺江郎三清

浅田兄弟古丸白子、常面三郎

江左 大之保姫宮義少屋敷

水戸岩井所方

上書 足将小路中候

浅田鉄斎

浅田門次郎

以上手紙中より宛先親款成候了御美常陸水戸
康治形岩井村と申和之白尚月廿七日首尾能討候中

浅田兄弟敵討一件

寺社方 寺田市兵衛

同 榎村留蔵

浜田郡方 渡辺四郎兵衛

浅田兄弟より差向^ケる紙面の写

江戸辰ノ口

大久保加賀守様御屋敷 水戸岩井町より

上書 足軽小頭中様 浅田鉄蔵

浅田門次郎

以手紙申上候 然は親敵成瀬万助義 常陸国水戸

鹿嶋郡岩井村と申所^ニて 当月二十七日首尾能討留申候

此候四月より五月迄
御為儀申上候事

四月廿日

浅田門次郎

浅田鉄斎

是輕小頭申候

水戸藩西飛騨之志吐荒増書取寫

一 鉄斎及初より身切迄是より身是迄
一 両肩二より力切迄也

一 衝立より水之防が山候子迄也

一 親之敵のうしり争をうけり
一 或る切は是迄也

浅田兄弟敵討一件

此段御内々ニて為御知申上候以上

四月晦日

浅田 門次郎

浅田 鉄蔵

足軽小頭中様

水戸様御飛脚の者咄荒増書取写

一 鉄蔵儀初太刀耳より切懸ケ立上り候ニ付 足を払ひ

両肩二の太刀深切込候

一 衝立ヲ以少々防ぎ候様子ニ有之候由

一 親の敵のよし声をかけ至て切口も見事候由

一 女房之祇儀三ヶ不立之横二寸深サ又ア一ヶ不
 横は寸程深サ又ア程一ヶ不立之骨も不當空
 涉祇之重衣祇之向正部後美刀を抜山交女房
 何と致ストヤて突山付之正部も不切之儀
 一 女房ハ其内よげ也一山
 一 女房之祇儀は向正部之山如女房ハ討果は存
 無之程一山お山付討果不中を山お山付討果
 一 女房ハ其内よげ也一山
 一 女房ハ其内よげ也一山
 一 女房ハ其内よげ也一山

一 女房の疵腰ニ二ヶ所有之 横二寸深サ五分一ヶ所ハ

横四寸程深サ五分程一ヶ所有之 骨ニも不当至て

浅疵の由 右疵は門次郎儀も刀を抜候処 女房

何を致スト申て突候付 其節ニても取切候儀

の由 女房ハ其内にげ出し候

一 女房^江疵付候儀 御尋有之候処 女房ハ討果候存念

無之邪魔ニ相成候ニ付 討果不申ては相成間敷哉と

そんじ候内にけ出候旨相答候

一 御尋の節兩人申立候ハ夕七ツ時過岩船^江参詣

長越山々九ヶ浦等々掛山々先方八年月廿五
日敵軍松共と見りし是れ山名相見一人史古後工入
宿山ふみ辺討果山

一飛獅子集の清水二浦中一人少方の岩井村邊に
上りて右衣の場水を通りて右の如強敵より出掛九ヶ浦
宿山ふみ辺指子足屋々谷中討山

一取崩涼く切下ヶ山舟留メ指山後木お成山為史故
留メ指ふ中山

一取人右討果山後山為舟留山九ヶ浦親分方山

罷越候の処 九兵衛を見掛候処 先方ニハ年月相立

候故哉 私共を見わすれ候旨相見へ候 夫より夜に入

宿_江ふみ込討果候由

一 飛脚に参る清水平助と申人 夕方より岩井村辺_江

廻_リニ出右の場所へ通り懸_リ候処 騒動にて直様九兵衛

宅_江ふみ込様子 見届候旨申聞候

一 両肩深く切下_ケ候_ニ付 留_メ指候儀不相成候間 夫故

留_メ指不申候由

一 兩人共討果候後至て落付罷在九兵衛親分方_江

兩人の物引取候様 申聞候ところ親分の事故定て

吟味可有迷惑の旨申聞候 其内岩井村成田屋

権十と申者冥加の為致宿度旨 申出候間同人宅江

兩人とも引取直ニ砂糖湯出し夫より食事差出し

兩人共能食事致落付罷在 食事の度ことに

毒見致候よし 其内磐舟より成田屋は商売

屋の事故外宿に致候様 被申出候ニ付 在へ夜半

のころ為引越候 尤九兵衛儀暫く当所に罷在候ニ付

若身寄の者有之 又々敵討ニ相成候てハ如何ニ付

人丈大將指出警書致山室

一平助は九条藩迄
納め死骸も付之ひ
者之と入之申と有之候
申上

一五人とも
浮人共
得下
一日
お

人夫大勢指出警固致候由

一 平助儀九兵衛宅江参り候節は兩人共最早刀を

納め 死骸に付そひ罷在り候 至て落付候挨拶

有之恐入候事と有之段申来候

一 兩人とも度々飛脚の儀相願候得共 不相成候とて

役人共より差留只今指ママ(持) 参の手紙は兩人申旨

役所にて認 役所より指出候ニ付持参の由 申聞候

一 日々の食事事毒見役申付有之毒味の上

為差出候よし

一 由人吉の落付大福判官渡河城下より
兄物騒交々越々何色も雷氣落付せりん
わ〜ぬ〜い

一 女房の里八心領内二里程隠て〜里より
一旦介の嫁〜縁切ふり岩舟の欠込縁切
史古九巻書片ありとあり〜里お〜い

浅田両士敵討始末

一 兩人共至^て落付大ニ評判宜敷御城下より

見物夥敷罷越候何れも勇氣落付をかんしん
いたし候

一 女房の里ハ御領国内二里程障^て候由に承り候

一旦外へ嫁し縁切不申岩船へ欠込縁を切

夫より九兵衛つまと相成候由相咄候以上

浅田両士敵討始終畢